

11 緩徐に進行する小脳症状を呈した54歳女性例

坪口晋太郎・矢島 隆二・樋口 陽
石川 正典・河内 泉・小山 諭*
西澤 正豊

新潟大学脳研究所神経内科
同 消化器・一般外科*

症例は54歳，女性．約1年で緩徐進行性の歩行障害と構音障害を呈した．左乳癌を指摘され，左乳房切除術施行後，化学療法（AC療法）を受けた．術後半年間は神経症候の進行は停止していたが，次のレジメン（PTX＋HER）に移行後，神経症候が増悪し，発症から約2年後に当科を受診した．注視眼振，軽度の構音障害，四肢・体幹の小脳性運動失調を認めたが，独歩は可能であった．頭部MRIにて小脳半球の萎縮を認め，緩徐な経過とあわせて脊髄小脳変性症を考えた．しかし

抗Yo抗体陽性が判明し，乳癌の加療で一時，進行が抑制されたこともあわせ傍腫瘍性小脳変性症と診断した．腫大した左腋下リンパ節の廓清と，化学療法のレジメン変更（UFT）に加え，IVIgを行った．以後，神経症候の進行は認めていない．抗Yo抗体陽性傍腫瘍性小脳変性症としては緩徐な進行を呈した貴重な症例と考えられた．

II. 特別講演

『Intra-tumor heterogeneityに基づくEGFR-TKI耐性メカニズム』

新潟大学大学院医歯学総合研究科
呼吸器内科学 准教授

各務 博